

メリカ政府が提示した見舞金や補償金により、魚の町は分断され、差別も発生した。しかし、当時の平和運動は、こうした地域の崩壊や分断・差別に注目しなかった。地域の被曝状況やその影響にも注意を向けなかった。ヒバクシャのみに焦点を当てた運動だった。この問題は、フクシマの今後起こりうる地域分断・差別につながっている。

第二に、封印された事件の裏で原子力の平和利用が進められ、原発によるエネルギー開発がこの事件を機に始まった（潜在的な核武装を準備することでもあった）。1954年3月、ビキニ事件発生の翌日に原子力開発に関する中曽根予算が可決され、以後、70年代からは原発3法などで交付金による地域開発が進められ原発は国策となり、現在まで54基が日本列島に作られた。ビキニ事件はその踏み台となった。その意味でビキニ事件は3・11フクシマの原点の位置にある。

焼津市は、東海地震震源地の真上にある浜岡原発から30キロ圏内にある。私たちのグループには環境派メンバーが多く以前から原発には関心を持っていた。2011年7月に「くろしおネットはまおか」が結成され、私たちのメンバーの一部もそれに参加した。そして全国的な反・脱原発のうねりのなかで、さまざまな活動を行ってきた。東京での集会・デモ、静岡市でのパレード（デモ）や、脱原発運動に関する講演会や勉強会、放射線講演会、写真展、有機農家グループとの交流など、

その輪は拡大しつつある。

昨年7月には静岡県では市民による原発県民投票が提起され、私自身も何人かの県会議員の説得にあたったが、結局、10月に県議会が否決されてしまった。

「ビキニ市民ネットワーク焼津」の活動も、いや地域のような運動に溶け込み一緒になってもやっているため運動の境界線が曖昧になっっているが、2014年のビキニ事件60年を目指して「60年プロジェクト」を昨年8月から始めている。

昨年12月16日の衆議院選挙は、自民党の圧勝で終わった。焼津市でも11月の市長選挙で市民派市長が大敗し、また自民党の市長が生まれた。

なぜ反・原発運動が選挙結果に結びつかなかったのか。歴史を逆戻りさせる政府に対抗するには対抗勢力の緩やかな結集が大切な

## のりから 運動現場 福島の女たちに感銘を与えた 「グリーナムの女たち」

2013年1月6日（日）経産省前の女性ネットでシネマデテントが開催された。（女テントは建てられた順番から「第二テント」と呼ばれていることが多いが、私はポーポワールの「第二の性」を連想するのであってそれは使わず、「女たちのテ

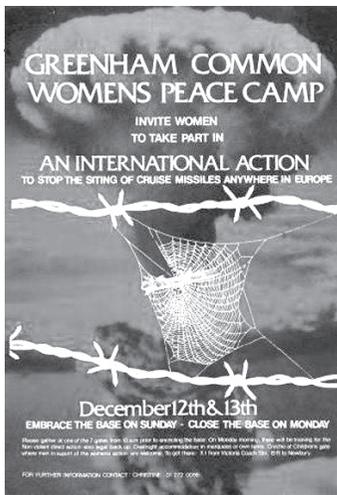
だが、どうも左側の人びとは、「正しい運動」に固執していて自己反省が弱い。いまだ冷戦イデオロギーも残っていて、リベラルを含む大同団結の戦略がない。原発反対運動も、単に反対するだけでは地域では弱い。私たちの周辺では中部電力の原発で働いている人や、下請け労働者、設備・部品の企業関係者も多い。具体的に持続可能なエネルギー供給の方向性を提示しないと説得力がない。地域生活圏の運動は、首都圏の活動とはかなり性格が違うということを指摘しておきたい。

（かとう・かずお／ビキニ市民ネットワーク焼津代表）

この間の運動については、「焼津流平和の作り方」[ビキニ事件50年]をこえて（2007年）、「ヒロシマ・ナガサキビキニをむすぶ 焼津流平和の作り方」(II)（2012年）、いずれも社会評論社。また、その間の私自身の総括は『やいづ平和学入門 ビキニ事件と第五福竜丸』（2012年）論創社にまとめてある。

黒田 節子

ント」と言っている）。さて、今回の映画は「グリーナムの女たち」だ。グリーナムへも実際に出向き、この映画を日本に紹介した近藤和子さんとは20年以上も前に出会っていて、この3・11を機に再会しているいろいろとお世話に



なっているし、ぜひともテントで映画をまた見たいと思っていたところだった。映画は映画館で見るといい。しかし、防寒対策で着膨れし、狭いテントをますます狭くしながら見る「グリーンナムの女たち」はなかなかの趣きがあった。上映後のお話会もまたいい感じのひとときだった。

1981年、イギリスはロンドンの郊外、グリーンナム・コモンにアメリカの巡航ミサイル配備が計画され、それに反対する数千名の女たちが集まり、キャンプが始まった。そのキャンプはなんと18年間も続き、ついに基地は撤去されるのだが、映画はそのドキュメン

トだ。画質は古くてもその内容はいまだに新しく、感動的だ。「女・子ども」と一括りにされ、弱き者とされている女たちが、一人ひとり誰に指示されるのでもなく声をあげていく、それだけでも目頭ウルウルだが、彼女らは基地を占拠してしまう。しかも、それは座り込

みと包囲、そして歌などによる非暴力のチカラによって。何

度も警官によってごぼう抜きにされ、逮捕され、裁判にもなる。それでも彼女たちは諦めず、歌で応戦。また、リーダーが統率するのはなく、たくさんのことを率直に話し合い、協力し助け合っていく。全編に流れるこれらの場面は、私たち福島の方たちの運動のありようについて示唆していて、とても刺激的だ。放射能はいやだ、原発はいらないという私たちの切実な思いを、女たち独自のスタンスと方法でどう表現し運動にしていっていいか、直に学べるところがたたくさん散りばめられている。

30年前のこの映画が世界中の女たちに勇気を与え、これまでの男性主体の運動を変えてきたことは間違いないが、そのポイントの一つはやっぱり「女たち」だろう。「グリーンナムの女たちは男を排除したのですか？」との質問に近藤さんが「そうです」と簡単明瞭に答えたのがなんとも印象的で、理屈っぽくなくてオモシロかった。ポイントの二つ目は非暴力直接行動 or 非暴力不服従ということだろうか。この二つのテーマは単に原発についてのみではなく、多様な運動についてもヒントを与え続けていると感じているのは、私だけではないようだ。このところのリバイバル上映がそのことを物語っている。

ベギー・シーガー歌による主題歌「キャリー・グリーンナム・ホーム」の他に、実はた

くさんの歌が入っているのが今回分かった。近藤和子さん仮訳による、そのうちのほんの一部を最後に紹介しておきたいと思う。



経産省前テントにて 筆者

◆（正面ゲート前の座り込みで）

彼女は、山のように

しぶとく、強く、前へ進む。

山のように

心は消せない

しぶとく、強く、前へ進む。

（ごぼう抜きが激しくなる）

女よ、女よ、強い、強い。

女はいや、女はいや、原爆は、原爆は。

◆（裁判の結果、39人が「平和」を乱した罪で刑務所送り）

ねえ、あんた、

どっちの味方なの

自殺の側なの

殺人の側なの

大量虐殺の側なの

女房をなぐる側なの

いのちが、きらいなの

どっちの味方なの。

（くらだ・せつこ）原発いらない福島の方たち